

アートを通した商店街の賑わいの創出
(商店街地域の空き家・空き店舗等の調査・研究。有効的な利活用。)

指導教員 金沢美術工芸大学 美術工芸学部 教授 真鍋淳朗 准教授 高橋治希
准教授 岩崎純 准教授 芝山昌也 教授 池田晶一 講師 稲垣健志

参加学生 伊木さなえ・中村清夏・野村明日香・山本いちご・筒井愛子・沖田愛有美
中桐聡美・上原勇希・笹井南海・皆川嘉孝・大野紗月・小岩井琳太郎・中嶋彩乃
林穂南・深田拓哉・水野由羅・庄子陽子・岡本孝介・小孫ちさと・松村れん
丹羽啓・江川真里奈・桶谷いづみ・杉山知里・村岡ゆきの・安藤果穂・笹谷美月
百歩陽子・安田日菜子・伊藤唯・加藤こころ・白木裕也・成子夏芽・喜多美友
桐本清花

1. 調査研究成果要約

- ①昨年度に行った調査・研究の結果、真鍋ゼミが母体となる「金沢美術工芸大学アートプロジェクトチーム[スズプロ]」が結成され、その研究成果が認められて、2017年9月3日～10月22日まで50日間に亘って珠洲市で開催される奥能登国際芸術祭へ招聘された。
- ②珠洲市飯田町商店街の中心にある1軒の古民家を有効活用して再生し、金沢美術工芸大学の美術・デザイン・工芸・理論を傾注した4つのプロジェクトを行い、その過程を通じて教育・研究・地域貢献のミッションを果たした。
- ③飯田町燈籠山祭りとヨバレへ参加し、日本文化の形成期から現代に至る歴史を蓄積して、環日本海の古くて新しいアートネットワークの再構築を視野に入れた多文化共生の交流拠点を地域と連携しながら飯田町に創った。

2. 調査研究の目的

昨年度に行ったフィールド・リサーチの蓄積を具現化したアートプロジェクトを行って、珠洲市を訪れる国内外の観客との交流の場を創る活動と地域住民と共に企画するワークショップ、ヨバレなどを開催して、アートを通した商店街利活用による地域の賑わい創出が目的である。これらの事業により、現代アートと食と祭りによる若者達と地域との交流の機会が増え、賑わい創出やUIターンの受け皿となる状況づくりに貢献した。（既に金沢美術工芸大学の卒業・修了生3名が移住している）

3. 調査研究の内容

本研究は、奥能登珠洲市飯田町の古民家を活用した「工芸建築」において、自然と風土とアートが一体となった21世紀型のアジア的な「社会の中のアート」を発信し、「工芸建築」の場が基点となり、毎年継続的に行なう本学学生と地域住民との交流から、さらに3年に1度の奥能登国際芸術祭ではアジアや世界の叡智（アーティスト）と本学学生と地域社会との交流から、日々創造されていく新たな「モノ」と日々繰り返される刺激的な「コト」が生み出されていった。

天然素材と伝統技術によって自然と風土が一体となった「工芸建築」の空間にサイトスペシフィック（その場の特性を活かす）な創作を可能とする場を創ること、奥能登国際芸術祭との連携による新たな付加価値を生み出すリレーショナルアート（関係を創るアート）の活動を行うこと、アート・アドミニストレーション（アートの管理・運営）の実践教育を行うことなどが主な研究の目的である。

奥能登珠洲市飯田町に多文化共生の交流拠点として世界の人々が出会う「スズ重細重街道」（仮称）を創りだし、アジアの都市との新たなネットワーク構築を図り、石川県においてアートによる地方創生の一翼を担い、地域活性化に貢献できることが本研究の意義である。

「第1回奥能登国際芸術祭 2017」の研究体制では、池田晶一教授（陶造形）、岩崎純准教授（絵画）、稲垣健志講師（歴史学・社会学）、高橋治希准教授（インスタレーション）、芝山昌也准教授（彫刻）が芸術祭と連動した作品制作を監修し、真鍋淳朗教授（アートプロジェクト）がプロジェクト全体の総括として監修し、94名の学生が参加した。

4. 調査研究の成果

9月2日から始まった「奥能登国際芸術祭 2017」へ参加し、珠洲市飯田町の古民家において昨年度の研究成果を具現化し、珠洲の地理的・社会的・個人的背景をふまえて、「静かな海流をめぐって」をテーマに飯田地区の明治期に建てられた古民家で以下の四つのプロジェクトを展開した。

古民家の蔵に残っていた漁網用の糸を藍で染め直した糸から作った組紐で暖簾「家に潜る」を制作し観客を海へ潜るように家の奥へ導き、通路に点在する四ヶ所の中庭には稲作の景色「こめのにわ」が制作され古民家と作品をつなぎ、その先に奥能登の森羅万象が内壁を覆い尽くすように綿密に描写された「奥能登曼荼羅」の蔵があり、さらに奥へ進むと蔵に収められていた膨大な量のモノを組み上げて天地が逆の宙に浮いた巨木「いえの木」の蔵があり、この土地の豊かさと厳しさをあらわした。

「第1回奥能登国際芸術祭 2017」へは11の国と地域から39組のアーティストが参加し、50日間の会期で7万1千人を越える来訪者があり、石川県内で最も少子高齢化の進んでいる奥能登地域をフィールドにして、アートの社会媒介機能による活性化が可能であることを明らかにする一大プロジェクトとなった。本チームの古民家での展示会場には、参加アーティスト39組中第2位の19,081人の来訪者があり、メディアにも数多く取り上げられ多大な反響があった。

5. 来年度以降の調査研究計画

この古民家での四つのプロジェクトは、3年後の「第2回奥能登国際芸術祭 2020」に向けて10点ほど保存される継続作品のうちの1点として利活用されることになった。5. 来年度以降の調査研究計画

この研究体制を来年度以降も維持しながら「第2回奥能登国際芸術祭 2020」に向けて、新たなプロジェクトの発案と準備作業を継続していく。

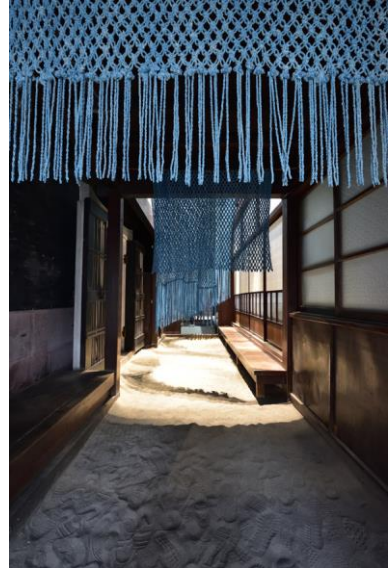
一方、芸術祭参加による有効活用とともに保存修復による古民家の存続をめざした伝統的技法材料による「リノベーション」に向けては、坂本英之教授（都市・建築デザイン）と一般社団法人石川県建築士事務所協会の監修により古民家の実測調査が開始されており、古民家内の8つの蔵に残存している「古文書の民俗学的調査」は、大安尚寿珠洲市教育委員会事務局次長監修により開始されている。この両研究は、能登の典型的な大型古民家での芸術祭と連動した有効活用をも可能にする「文化財登録申請」を念頭に行うものである。

金沢美術工芸大学 珠洲アートプロジェクトチーム[スズプロ]

学内の専攻を越えた学生と教員によるアートプロジェクトチームとして、奥能登国際芸術祭への参加を機に結成された。珠洲の地理的・社会的・個人的背景をふまえて、「静かな海流をめぐって」をテーマに飯田地区の明治期に建てられた古民家で四つのプロジェクトを展開した。

－ 静かな海流をめぐって －

家に潜る 古民家の蔵に取り残されていた漁網用の糸を藍で染め直し、その糸から作った約 1000 本の組紐で暖簾を制作し、海に潜るような感覚で家の奥へ導いた。



こめのにわ 元々あった樹木や庭石、池などを活かしながら、四ヶ所の中庭に稲作の景色を作ることは、家とその中の作品をつなぐ重要な要素と考えた。



奥能登曼荼羅 豊かな奥能登の森羅万象から私たちが体感した原初的な美しさを蔵の内側を覆い尽くすように綿密に描写した空間では、少しずつ社会が変化しながら歴史が積み重なり受け継がれてきた土地の姿を、自らが囲まれるようにして見つめることができた。





いえの木

蔵に収められていた膨大な量のモノを組み上げて天地が逆の宙に浮いた家を侵食するかのように生えている巨木からは、私たちは遠い時間を遡っていくように様々なことを想像することができ、この土地の豊かさと厳しさをあらわしていた。

6. 調査研究に対する地域からの評価

地域に入り込んだ調査・研究が行われ、空き古民家が利活用された交流拠点ができて人の往来が増加し、アートによる飯田町商店街地域の賑わいの創出と活性化が実現された。飯田町商店街としても奥能登国際芸術祭での盛り上がりに乗りたいと考えており、金沢美術工芸大学と連携して今後もプロジェクトを共に進めていく予定である。